

市場の失敗と政府の役割

文：栗原 久

板書例

【市場の失敗】市場では資源の効率的な配分ができないケース

①公共財

みんなで共通に使う財・サービス

利用者一人ひとりから代金を徴収することが難しい

道路・灯台・消防

②外部不経済

ある活動が直接に関係しない第三者に悪影響を及ぼす

公害

企業がコスト負担なしに自然環境を過剰利用した結果

③独占

市場で占めるシェアが大きい企業が存在する

価格が高止まりしがち

水道・電気・ガス

④情報の非対称

売り手と買い手の持っている情報に差がある

消費者被害

買い手の側に十分な情報がないと不利な取引となる



政府による調整が必要

しかし

政府の失敗も

市場経済の「玉にきず」

完璧。欠点や不足のないことを意味します。元々の意味は、「きずのない玉」のことだとか。だから、ほぼ完璧なのに、ほんのわずかな欠点があることを、「玉にきず」というのですね。ちなみに、完璧の「璧」の脚は、「土」ではなくて「玉」です。「きずのない玉」だからと覚えておくと、間違えないのではないのでしょうか。

さて、市場は、希少な資源の配分を効率的に行います。これを政府による計画と指令によって行おうとしても、うまくはいかないでしょう。

しかし、市場経済にも「玉にきず」などところがあります。いわゆる「市場の失敗 (market failure)」です。この「市場の失敗」、つまり市場の働きに委ねることが難しい例を具体的に見ていきましょう。

「市場の失敗」の例

①みんなで使う財・サービスの供給

例えば、道路や灯台などは、みんなで共通に使う財・サービスですが、これらは、利用者一人ひとりから代金を徴収することが難しい、あるいは、代金を徴収しようとするれば大きなコストがかかるものです。ですから、このようなサービスを、民間企業が供給することはできません。そこで、政府が税金を使って、「公共財」として供給しています。

消防サービスの利用については、代金の徴収が可能かもしれませんが、しかし、代金を払えないからといってその人の家で火災が発生した場合、これを放置することはできません。類焼の被害が拡大する恐れがあるからです。そこで、消防サービスについては、政府が供給する役割を担っています。

②公害という外部不経済の発生

高度経済成長期に、日本は、深刻な公害問題を経験しました。これは、企業の生産活動で排出された有害物質が、地域住民に健康被害などを生じさせた問題です。

公害は、企業の活動がこれとは直接に関係しない第三者に悪影響を及ぼす「外部不経済」の典型例です。河川や大気などの利用に価格を設定できない、つまり、企業がコスト負担なしに自然環境を過剰利用してしまうことから、この問題が生じます。そのため、この場合でも政府が規制を設けるなどの介入をします。

③地域独占と公共料金

例えば、一定の地域内で複数の水道会社がそれぞれの水道管を敷設するより、一つの会社が水道管を一本だけ埋設し各家庭がそこから取水するほうが効率的でしょう。一般に、巨大な生産設備が必要な産業では、このような状況が生じます。他には、電気やガス、鉄道などがあります。実際、これらの産業では、これまで各地で地域的な独占が認められてきました。

しかし、地域的な独占が認められるようになると、価格が高止まりしがちです。このため、政府がその決定に関与することがあります（公共料金）。

④売り手と買い手の「情報の非対称性」

中古車の売り手は、修復歴など販売する車の状態をよく知っています。一方、買い手の側には、十分な情報がないことがあります。このような状態で売買が行われると、「不良品をつかまされた」といった事態になることがあるかもしれません。

市場での取引は、本来、売り手と買い手が同量・同質の情報を持っていることが前提です。しかし、取引される財・サービスによっては、売り手と買い手の間に大きな「情報の非対称性」があります。これが、消費者被害などのトラブルの原因になります。そこで、一定の資格を持った販売士が情報を買い手に丁寧に伝えなければならないことを関係業界が自主的に決めたり、法律によって製品の品質表示に関する規定を作ったりする措置がとられています。

「政府の失敗」への懸念

以上のように、効率的な資源配分に市場が「失敗」することがあります。これを補うのは、政府等の役割です。

しかし、政府等が関わればすべてOKかといえば、これが難しいところです。例えば、日本では、救急車を公共サービスとして無料で利用できます。しかし、これが「救急車をタクシーのように使う」ムダを生じさせているとの批判があります。また、別の例としては、公共料金として定められている上下水道料金は、物価がほとんど上昇していないにもかかわらず上がっています。

「市場の失敗」を補う働きを期待される政府等の仕事でも、時として失敗となることもあるのです。そのような視点からも、子どもたちに考えさせてみてはいかがでしょうか。

※内容については万全を期しておりますが、配信時現在の情報を基に執筆していること及び執筆者個人の見解も含まれていることをご理解のうえ、ご利用ください。